

令和2年（2020年）1月8日

新年および3学期始業の校長講話（放送）

須坂高等学校長 本多健一

生徒の皆さん、おはようございます。校長の本多です。新年および3学期の始業に当たり、少し話をします。

皆さんは、2020年をどんな志を持って迎えたでしょうか。

予報に反して晴れ上がった1月1日に、私は、飯田市にいる義理の両親のところへ行ってきました。途中、岡谷トンネルを抜けたところの、条件が合えば数秒間だけ富士山が見える場所があるのですが、幸運にも富士を拝むことができ、遠くても伝わってくる存在感に改めて感動しました。

高校3年生の時、私はよく遠くの山を眺めていました。というのも、その山のずっと向こうにある北海道に憧れていたからでしたが、「とにかく親元から離れた、しかもできるだけ遠い北海道にいる自分」を想像しては、もがいていたころのことを思い出すと同時に、そういえば国語の教科書に椎名誠さんの「遠くを見なくなった日本人」という文章があったっけ・・・などということも思い出しました。気になったので、昨日、WEBで検索したところ、1995年、1月10日の朝日新聞の「論壇」にあることが分り、朝日新聞の縮刷版を閲覧しに須坂市図書館に行ってきました。

見つけた文章には「千葉の幕張に引っ越した椎名誠少年が、海の向こうにあるアメリカに思いを馳せ、『よし、大人になったらアメリカに行くんだ。世界中にいくのだ』という大志を持って海を眺めていたこと。最近の大人は、遠くを見なくなったこと。大人が遠くを見なくなれば、子どもたちも遠くを見なくなる。」というようなことが書かれていました。椎名誠さんは、おそらく、物理的な距離のことだけを言っているのではないと思います。同じように、本校の中庭にいる「希望の像」も「遠くを見なさい。そして、自分で答えをみつけなさい」と言っているような気がします。

ついでですが、同じ1995年1月15日「成人の日」の、哲学者イマニエル・カントの「未成年」を引用して語った社説を見つけたので簡単に紹介します。

そこには、カントによる「未成年」の定義と、そこから脱却するための方法と、その際に注意すべき2点など、探究や哲学対話に通じる内容が書かれていました。社説の筆者は、カントの言葉を紹介し、最後にこうまとめて成人式を迎える若者にエールを送っています。「みんなは、そう言うけれど、本当にそうなのかと問い詰め、考え抜いてゆくことが、新しい時代を切り拓いていく第一歩になる。人間は誰でも考える力をもっているのだから、勇気を持ってこの力を使おうではないか」と。

2020年の昨今、ようやく言われ始めた「主体的な思考力・判断力・表現力の大切さ」について、今から25年も前にカントの言葉を引用して述べた社説の筆者の先見の明のすごさと、その250年も前に、すでに教育の本質をつかみ取っていたカントの本質取観のすごさに気づかされた文章であり、漸くだけれど、まともになりつつあるこれからの教育への期待が持てた大変興味深い文章だったので紹介しました。

ネズミ年は、新しいことを始めるのによい年だと言われます。生徒の皆さんにとって、佳い年になることを祈念して、新年および3学期始業の挨拶とします。